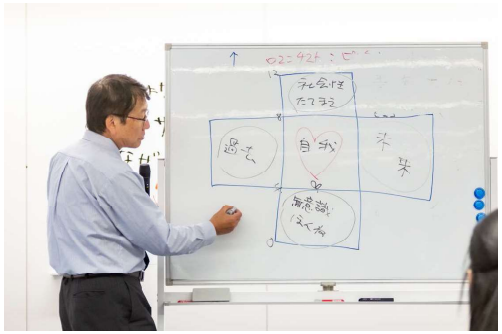
パレット・レター

No. 25
Jan. 2020

2020年1月9日発行

パレット・レターは「子ども若者発達支援センター」からのお知らせです。



どれだけ〝良い刺激〟を準備してあげられるか

現在、日本人の読解力が低下していると言われています。いわゆるSNS文化と呼ばれる短文のやりとりが増えたことや、情報を文字からではなく、映像から得るようになってきているからだと考えられています。

映像からでしか刺激を取り入れられないと、子どもたちの世界はそこから繋がる世界のみになります。このままでは8歳に到達したときに、本を読まなくなるのではと危惧されています。

そしてSNSから入ってくる刺激は、基本的に良い刺激が多くありません。もちろん親も完璧ではないので、子どもたちに良い刺激だけを与えているわけではありませんが、読書そして本は良い刺激につなげやすいものです。

子どもたちを、どういう刺激につなげてやれるか、大人が子どもにどれだけ良い刺激を準備してあげられるかが重要です。

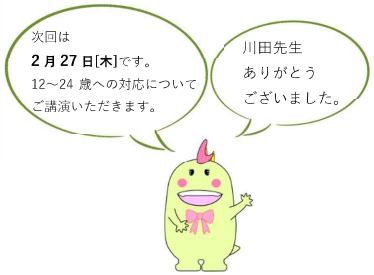
スマホに勝てるのは学校の先生だけ

スマホやゲームは大敵です。これらは〝親子の距離〟に入ることができます。愛着ではありませんが、子どもたちにジョイントしやすいものです。スマホやゲームには、そういった良くない刺激があります。

大人たちは、スマホに代わる良い刺激を、子どもたちに与えることを意識的にしなければなりません。ゲームから脱却できる子どもは、周囲と現実の世界で活き活きとした温もりのあるかかわりを持っている子です。いかにして、活き活きとしたぬくもりのあるかかわりをつくるかが大事です。

スマホに勝てるのは学校の先生だけです。家でゲームやスマホを使っている子どもたちも、学校に行っている間はそれらを使えません。学校であれば、集団そして先生との活き活きとした結びつきをすることができ、人とのかかわりに戻ってくることができます。スマホやゲームがある家の中では、親がスマホに勝つことはできません。

〝園や学校での生活を、子どもたちにとってどれだけ活き活きとしたものにしてあげられるか〟これが我々大人たちの課題です。



子ども若者発達支援センター会報

パレット・レター

- 発行 -

四国中央市子ども若者発達支援センター

TEL 0896-28-6029　FAX 0896-28-6030

palette@city.shikokuchuo.ehime.jp

カラー版のパレット・レターはこちらで読いただけます

Palette公式フェイスブックはこちら

Paletteまたはパレット・レターに関するお問合せは上記まで。
パレット・レターの表紙になってくれるお子さんを募集します。
ご協力いただける方は、Paletteの職員または上記までご連絡ください。

「園や学校での生活を、どれだけ活き活きとしたものにしてあげられるか」

川田行雄-かわたゆきお-
京都府立大学/日本大学大学院卒
香川県西部子ども相談センター所長、県立斯道学園長を歴任。
臨床心理士として活動しながら、短大・専門学校講師、発達障害相談員、スクールカウンセラー等を務める。

あったか子育てセミナー

愛着の理解と支援

臨床心理士　川田行雄 先生

12月20日にPaletteで開催された、令和元年度第2回四国中央市あったか子育てセミナーは、第1回に続いて臨床心理士の川田行雄先生をお招きし「愛着の理解と支援」と題し、4歳から12歳までの子どもへの対応について、お話しいただきました。

今回はまず「なぜ、人は木から地上に下りたのか?」というテーマについて、人と遺伝子の一致率が非常に高く、木の上で生活をする猿やチンパンジーとの違い、そしてそれぞれの〝自立〟の時期と、木から下りた人が築いた〝家族〟の役割について教えていただいた後、今回のテーマに入っていきました。

今回のパレット・レターでは、講演の中で先生がお話しされたことを、一部ではありますがご紹介させていただきます。

〝集団〟が自我の形成に影響を及ぼす

4歳は乳離れをする時期です。子どもたちは、母親から離れて外に成長を求めるようになります。

4～8歳の頃は、夜は家族という集団の中で、そして昼は幼稚園や保育所といった集団の中で育ちます。そのため、これらの集団が、子どもたちの自我の形成に大きな影響を及ぼすことになります。

3歳半になると、自閉症のある子どもも母親から離れていきます。愛着の対象を外に求めるようになり、他の母親に寄っていって、ハイタッチをしてまた自分の母親の元に帰ってくるといった姿が見られるようになります。園では、突然指導員の手をひいて外に遊びにいくようなこともあります。

中期の自我づくりを始めていくこの時期に、子どもたちは外との関わりにより、自分を成長させようとしていきます。

チンパンジーは、この時期に木に登り始めるようになります。そして大人の集団に入り、大人を真似るようになります。人間もそういった力を潜在的に持っています。お手本さえあれば、子どもたちの力を、どんどん引っ張りだすことができると思います。

先生を真似る

多動傾向のある子どもが手に負えなくなるのが4～5歳の頃です。活動的、活発的になり、他の子どもたちの遊びの中に入りにくくなります。自分自身でも抑えることができない時期があります。

そういった子どもには、園の先生がお手本となり、感覚運動を上手に引き出してあげるような個別の対応が必要です。頭の中に先生が表象化されて、子どもはそれを真似るようになります。真似をする対象が、母親から〝集団の中で拠り所になる人〟つまり先生に代わるのです。そうすることで、最初は集団に入れなかった子どもも、先生と一緒に徐々に入っていき、社会性を身につけるようになります。入学までに集団の中で学べるようになるのです。

0～3歳の間に、しっかりした愛着関係ができなかったことにより、自我が十分に働かず、集団行動がとれないような、いわゆる愛着障がいのある子どもにはどのように関われば良いでしょうか。

よく「母との愛着関係を復活させる」と言われますが、基本的には〝乳離れをしている〟ことを念頭に考えましょう。そして、集団の中で個別の関係性と個別の表象化を、園の中で作っていかなければという心構えでいた方がいいです。その上でまずは、担当の先生が集団の中で1対1の関係を大切に自我を育てながらで親子の距離から始め、最終的には集団の中に入るということを心掛けてください。集団との関わりを、その子を受け入れた先生との間で作ってください。

先生との愛着関係を上手く築ければ、子どもは先生の真似をしてくれるようになります。集団の中で出会った、心の拠り所になる大人ができることで、子どもは先生を真似ながら、そして自分の中に取り入れていくようになり、成長していきます。

家族は自分のために　自分は家族のために

今、家庭の中で深刻な問題が起こりつつあると思います。4～8歳は、家族という集団の中での自分づくりが始まる時期ですが、現代では、物理的に家族が家族として存在することが容易ではなくなってきています。児童虐待があった家庭の多くで、子どもの前で行われる配偶者への暴力、いわゆる面前DVがあったというデータもあります。

家族の輪が作りにくくなっている世の中で、今、子どもたちは育っているのです。

少し前は、テレビを中心に家族関係を築いていました。しかし、テレビがスマホに代わりつつある現代では、家族は分断され、子どもたちは家族とのかかわりを学べなくなっています。家族とのかかわりを学べなかった子どもたちは、自分が親になったときに、やはり家族関係が築けなくなります。4～8歳の大きな課題と言えます。

母親に対してぞんざいな口をきく子どもを見たことがあります。話を聞いていく中で、祖父が母に対して同じような口をきいていたことがわかりました。家族の中での力関係が、子どもの中に入ってきたことにより、祖父を真似て母親に対して高圧的な態度をとっていたのです。

子どもたちは、家族の中での力関係の上の人を表象化し、真似をします。家族の関係性はとても大事です。〝家族は自分のために、自分は家族のために〟そして〝家族が楽しければ自分も楽しく〟です。

先生の役割

先生は、クラスの中で一人で遊んでいる子どもを見つけ時に、子どもたちをどう繋げるかを考え、必要な役割をしてあげなければいけません。子どもたちはかかわり方がわからないのです。子どもたちに園の集団の中で人と繋がる術を教えてあげてください。こちらも4～8歳の大きな課題です。ここで友達との関係が築けると、いじめをしない子どもになります。いじめは関係が切れているから起こります。

子どもたちが繋がり合える関係を築くためには、心の拠り所となる人が、子どもの良いお手本となって良い集団を築くこと、そして愛着、発達に課題のある子どもについては、まずは個別の関係づくりから入っていくことが大事です。

本や文字の世界につなげていく

子どもたちは0～4歳の時期は母親（愛着関係にある人）から、4～8歳は自分の目の前にある家族やクラスの仲間から学びます。そして8～12歳になると、本を読んでその内容が頭の中でイメージでき、そしてそこから学ぶことができるようになります。実物が目の前になくても文字があれば、そこで展開されている世界を、自分の中に取り入れることができるようになります。

子どもたちは本さえあれば、無限大に世界を広げることができます。自分が体験してこなかったようなことも、昔の知恵から学ぶことができます。

子どもに幼少期から読み聞かせをしていると、本を見てそこから知識を仕入れるということが習慣化されます。そしてこの時期に本好きになり、親がいなくても本から知識を取り入れることができるようになります。

この時期の子どもの育ちを保障するためには、この前段階から子どもたちを、本や文字の世界につなげていく操作が必要です。

（裏面に続く）